

ジョルジョ・アガンベン[著]『幼児期と歴史—経験の破壊と歴史の起源』(上村忠男[訳])
岩波書店(2007年)[Giorgio Agamben
(1978, 2001) INFANZIA E STORIA
Distruzione dell'esperienza e origine della storia
Giulio Einaudi S.p.A Torino]

<書評>

中部支部発行のニューズレター恒例の<書評>欄は、これで4年目に突入した。軽い気持ちで始めたのだが、みなさんの熱意ある貢献により、毎年充実した書評をお届けできていると思う。

<書評>は、非常に有用であると感じる。情報収集においても、大きな役割を果たす。書評をみながら、読み始める方も多と思う。また、院生でも、書評を書くことによって、自分の頭の中を整理するために利用できる。院生が書いた書評は丁寧に書いてあり、思いのほか有用であることを発見した人も多いだろう。そして、何よりも、同業者がどのような本を読んでおり、どのような評価を下しているのかを読むことも楽しい作業である。もう一つ付け加えるならば、本<書評>欄の特徴は、社会人の方にも参加していただいている点である。何らかのかたちで、「コミュニケーション学」と関わりを持ち、社会に出て、本支部の会員、準会員(=無理やり会員にされた方?)として、関わっていただいていることは、こちらにとっても大きな刺激となる。コミュニケーション学に関わり、社会に出てから、どのように学術をリアルワールドに関連付けていращやるのであろうか——大変、興味深いと思ってしまうのは、私だけではあるまい。

毎年、<書評>欄は設けたいと思っている。編集作業は、2月下旬に行いますので、それまでに、原稿をいただけたらと思います。原稿は、藤巻までお送りください。

(送付先: fujimaki(アットマークを入れる)u-shizuoka-ken.ac.jp)

もし、これから貴方が自由に言葉を織りなすことのできない姿に晒され、ある生殺与奪の仮面を被った“大人”に、「この世界で生きていならば、わたしに自分の人生をすべて語りなさい」と言われたら、どのように今の自分自身を語る事が出来るだろうか。

本書、『幼児期と歴史—経験の破壊と歴史の起源』の中で、アガンベンは次のように述べている。

人間のインファンティアが存在するからこそ、言語活動は人間的なものとは同一化されえず、ラングとディスクール、記号論的なものとの間には差異がみられるからこそ、このためにこそ歴史は存在するのであり、このためにこそ人間は歴史的存在なのである。(p92)

インファンティアである時、すなわち、ある人間が「言葉を持たない、言葉を織りなすことのできない状態」である時、その人は、ラングがディスクールへと移り変わる以前の状態から、自身の無力さを知り、力を持つ歴史(時間)と社会の門前に立ちすくむのである。その状態は、日常にあふれる乳母車に乗せられて喃語を話す子どもたちのように、人間にとって初めてのインファンティアたる幼児期の子どもにとって、誰しもが通る当たり前の通過点である。またそれは遡行してみても、“大人”になって、未だ自分が未熟だと子どもたりえると思いつく瞬間($K\alpha\rho\acute{o}\varsigma$)としてもインファンティアなのであり、または身体不自由など、思わぬアクシデントや、年老いて自身の歴史に違和感が生じた時に、その軌跡として気づくことでもある。本書は、その生まれてこばを獲得する幼児期に経験したはずの経験できない経験、または超越論的经验という経験し得ないという空虚(潜勢力)という、ある種のレトリカルなコミュニケーションを、人間は見失いがちであることを、いくつかのキーワードと共に詳説に述べている。アガンベン独特の文献学的な作業に苦痛を感じる読者によっては、本書はペダンチックだと僻見に陥りやすいのが難点かもしれないが、彼のその主張は複雑が故に、最後はシンプルな姿に紐解かれるのである。

先の引用についてさらに説明を付け加えると、ここでアガンベンは、言語学者エミール・バンヴェニストの研究を取り上げて、彼がソシュールからさらに踏み込んで「二重の指示作用」として定義した、「記号論(認識的)的なもの」と「ディスクールである意味論(理解的)的なもの」における差異に注目し、これらの関(しきい: 他の著作でもあるように、アガンベンの作品は徹底して、何かと何かの間にある「関:

soglia とアガンベンと呼ぶ」にあるうごめく何かにおいて考察する。)にあるインファンティアの世界を定義するとともに、そこから導かれた2つの作用が登場するその時こそ、歴史が生まれると定義している。

副題に「経験の破壊と歴史の起源」とあるように、本書では、その経験と歴史にある言語活動の重要性を導き出そうとする。特に「インファンティアと歴史」の章では、現代の人間は、近代科学の到来以降、経験が剥奪され、あらゆる出来事が経験に翻訳することを、日常のあらゆる生活の中で与えられておらず、いわばハイデガーの世界内存在のごとく、只々その日常を生きているのだと説明している。そして、ベンヤミンが1933年のエッセイ『経験の貧困』で指摘していた説明に付け加えて、こう述べている。

「経験が必然的に関連しているのは、認識ではなくて、権威であるからである。すなわち言葉と物語なのだ。ところが、今日では、経験を保証するのに十分な権威を自由に使える者は、見たところ、もはやだれもいないようである。また自由に使えるとしても、みずからの権威の基礎が経験にあると申し立てようなどと思いつく者もない。」(p21-22)

つまり経験とは認識ではなく、権威という失われたある種のレトリックなのである。現代の人間は、経験が、虚偽や恐るべきものとしてしかもはや残されていないと、そこから選び取ることができず、またそこから避けるためにと生きようとした姿に変わり果ててしまったという。アガンベンの例で言えば、麻薬の例がそれである。以前、麻薬は使用者が自身の経験に向けて使われていたのに対し、現代では経験から逃げて、経験を破壊するために麻薬を用いることとして変わっているのである。私達は現代において、このように経験がまったく違うものにすり替わって、日々常日頃のなかにアディクションと化してしまうというのである。

それでは、経験は様々な剥奪を経て、現代に何を残しているのか？アガンベンはそれについて経験の歴史を辿っていく。剥奪された経験とは、その経験から「空想」の切除が行われ、デカルトと近代科学の認識「エゴ・コギト」へと、経験なき主体が変わったこと、残余として「願望」がサドとカヴァルカンディのような「ファンタスマとエロース(愛)」における主体と対象の関係性から願望と欲求(対象a)の一致/不一致へと通じてヘーゲルの自己意識の関連性へと論じている。そこからさらに、主体の認識について、カントの超越論的自我と経験的自我についての対置、そこからヘーゲルの弁証法と19世紀心理学、精神生理学、「生の哲学」として、ディルタイの「エアレーブニス」といった考えや、ベルクソンの「純粹持続」、フッサールの『幾何学の起源』での言語の重要性へと経由する。そうした超越論的主体と言語活動の関係性を歴史化した後、インファンティアの必要性について次のように言う。

人間のインファンティア[言語を持たない状態]として、経験は人間的なものと言語的なものとの間のたんなる差異であるにすぎない。人間はつねにすでに語る存在ではないということ、人間は言語活動をもたない存在であったし、いまもなおそうであるということ、これが経験ということなのだ。(p84)

生まれ持って言葉を語る人間がいないのは、それが、すべての経験と歴史を持って生まれなかったことと同じである。誰しもがそのインファンティアから、言葉を話すことと話されることに違いをつけて経験していく。その過程を持つことが歴史の存在であり、それを知るためにインファンティアは、繰り返しあらわれて来るのである。すなわち、このインファンティアたる状態とは、本書になぞらえた1969年に路上で倒れて失語症となったバンヴェニストやベンヤミンの幼年時代の引用に限らず、誰しもが経験して失ったものであり、どこにでもある姿だということである。

では、そこで、この冒頭に挙げた「この世界で生きたいと願うならば、自分の人生を語りなさい」という呼びかけに、いまいちど戻りたい。もちろん、この呼びかけは、どこにも存在しない空虚にしか過ぎない。大きな力を持つ“大人”のいる社会の中で、歴史(時間)と経験が結びついていることを、現実にはそこへ投棄され続けているということ、フィクショナルにただ示しているだけである。しかし、実際に私達はこの“社会”において生きる上で、言葉を持つことが、インファンティアを経過したことであり、ここでの経験と同じように、歴史化するまでは実際に目の当たりにしていない。哲学的なこの本書の意味する自分自身を、歴史として経験する必要は現実のどこにあるのだろうか。特に人文科学を避難する世界の住人からしてみれば、無益な非技術的なものとして切り捨てられるであろう。もちろん、その意図でこの呼びかけはなされているのだが、貴方が自身のインファンティアを見つける時、自分自身を語る意義がどのように示されるのだろうか。現代にそんなフィクションのような事象がありうるだろうか。

その現実への私の応答の一つとして、福祉社会学のキーワードにある「生い立ちの整理」というタームについて説明したい。それは、ライフ(・)ストーリー、ライフヒストリーという研究技法(学派によって様々な名称がある)として、社会学や社会心理学でも一般的に用いられているものである。ある社会生活の困難な人間が、社会において自立した生き方を獲得するために、生まれてから今までの、これまでのバラバラになった断片的な人生を振り返り語りながら、新たに言語としてまとめ上げる作業がそれである。

特に児童福祉の現場では、「ライフストーリーワーク」「生い立ちの整理」といった技法として、その子どもの歴史化が用いられていることでも、本書によるインファンティアと歴史における実践として示すこ

とが出来る。様々な虐待を受けて、児童福祉施設に措置される子どもや、養育困難から生まれて、親もよく知らないまま育った子どもの中には、どうしても埋められない幼児期の境遇、例えばマターナルディプレッション（母性剥奪）といわれるような、愛着の欠如による影響から、知的や精神の発達遅滞によって障害としてみなされて、公共的な社会に通ずる自立のロゴスを持ってない、二重のインファンティア、過去の幼児期の喪失経験と、現在の社会的にインファンティアな経験をしているのである。つまり、年齢、身体的に大人になっても、“社会的な大人”として生きていく上で制限が伴うのである。そこから健常に育ったとしても度重なる喪失体験やトラウマに苛まれ、自己を肯定的に向き合うことの困難が伴うのである。そのために用いられるライフストーリーという自己自身の歴史化は、PTSD等のリスクもありながら（社会において）治癒的効果をもたらす大きな役割を果たしているのである。それは、パブリックとなる社会において、いかに言語と歴史が必須の能力として、今の我々に隠れたままの力（潜勢力：δύναμις）として、インファンティアが闕の中に埋め込まれているかがわかるのではないだろうか。

今回は書き加えられなかったが、その実際にアガンベンが述べる歴史の方法については、本書では「おもちゃの国—歴史と遊戯にかんする省察」の章、「時間と歴史—瞬間と連続の批判」の章、「おとぎ話と歴史—プレセペにかんする考察」の各章から時間の概念を通して、カイロス（≠ αἰών ≠ Κρόνος）の意義やレヴィ=ストロースの考察から、遊びによる子どもと“大人”についての差異について、重要な論考がくりなされている。それらを含めてさらに、アガンベンのインファンティアと歴史のつながりが指摘していることは、決して哲学的な世界だけではなく、このライフストーリーの例のように、語る為の闕として、常にことばの世界という、レトリカルなコミュニケーションの中で浮かび上がることだろう。そして、アリストテレスやアガンベンの言葉に語り尽くされることなく、このパレーシアでサバルタンな「自分自身を自由に語ること／語れない」という背景にある、この歴史（時間）、経験（社会）、言語（レトリック）とのテーマは、深まり深まってレトリカルに闕の中でうごめいているのである。

松林 邦夫（エリザベス・サンダース・ホーム職員）

Sue, D. W., & Sue, D. (2012). *Counseling the Culturally Diverse: Theory and Practice (6th ed.)*. New York: John & Sons.

1981年に初版が出版されて以来、Counseling the Culturally Diverse: Theory and Practice（以下 CCD）は多文化心理学（multicultural psychology）の在り方やマイノリティの精神保健（minority mental health）を向上するといった課題を理解するうえで欠かせない「教科書」として確固たる地位を築いてきた。

CCDの構成は次の通りである。まず第I節では、現在アメリカで行われているカウンセリングがいかにマイノリティ集団への文化的抑圧（cultural oppression）を象徴するかという著者たちの見解を4つの側面（①ひとの情緒や認知といった社会の捉え方、②職業人の行動が規定される精神保健政策の在り方、③多文化に配慮したカウンセリングを行ううえでの課題、そして④文化的アイデンティティの形成過程）から解説している。その目的は、読者に「民族的・文化的な気づき（racial/cultural awakening）」を得てもらうことにある。

第II節では、アメリカ社会で生活する人々を、民族や信仰、性別など文化的抑圧の犠牲者となってきた小集団ごとにとまとめ、彼（彼女）らの背景とカウンセリング時の留意点について紹介している。著者たちはこの節の導入にあたる章で、クライアントの文化を理解し尊重して仕事を遂行する能力（cultural competence*）の必然性を丁寧に説いている。これは、前節で「気づき」を得た読者が、目的意識をもって次の章から始まる情報を吸収できるように配慮された構成といえよう。

CCDは教科書であると同時に、著者たちの社会正義を実現するためにカウンセリングがあるという信念を広めるためのツールでもある。著者たちはカウンセリングを対人相互作用、コミュニケーション、そして社会影響過程のひとつと位置づけ、読者に①アメリカ社会の規範が異性愛志向の白人男性の価値観によって形作られたものであると納得させ、②それに社会化された自身の文化的アイデンティティを内観し抑圧者側に立たないよう警告し、③そのうえで他文化を理解し尊重するカウンセリングを実施するための提案を数多く列挙している。しかし、詳細な描写は意外に少ない。カウンセリング活動の外観を捉えることはできるが、実践の手引きとするにはやや不足がある（後の2013年秋に事例研究の解説に焦点を絞った福読書が発行されている）。

集団「間」の差異に着目する CCD だが、集団「内」の差異にも留意している。例えば、カウンセラーがどの程度、西洋的職業観に囚われているかを自覚するために文化的アイデンティティ形成モデル（the Racial/Cultural Identity Development Model）を使

用して自己分析をすることを求めている。クライアントに対しても同様にこの視点から分析をして、クライアントの認知が歪んでいるようであれば正すことを検討すべきだとしているまた、西洋的ではない価値観を実施するためには、従来の面談室で「待つ」戦略だけではなく、地域社会にでて活動することも職務とするべきだと推奨している。さらに、積極的に地域社会にでて白人的ではない健康観を体現しているマイノリティに会い見識を深めることも勧めている。

どれも素晴らしい提案だが、個人的にはそれらが支援の現場で実施されることには懸念がある。例えば、クライアントの認知を変えることはカウンセリングセッションにおいて積極的に取り組むべきことと定めてよいのだろうか。仮にカウンセリングによって、抑圧の中で形成された自己否定の強い文化的アイデンティティを肯定的なものに再形成できたとしても、クライアントがいま生きている地域社会に存在する抑圧それ自体が是正されるわけではない。つまり、クライアントが現状を異なるように把握することでストレスを軽減させるという対処法には限界がある。また仮に成功した場合、クライアントは多角的視野を持つがゆえに抑圧者の気持ちすら汲みとろうと努力して、自分の受けている抑圧行為と相手の歴史観・世界観の間で苦しむのではないだろうか。その活動は社会に変革をもたらす一歩となるだろうが、目の前の人の利益となるとはたして言えるのだろうか。

うへの延長になるが、公衆衛生学的な表現を用いれば、宿主因子（クライアント）だけで問題が解決されることは意外に少ない。クライアントの精神的健康状態を向上させるためには健康の社会的決定要因を整える必要がある。当事者の、それも片方だけへの働きかけの限界、つまりカウンセリングの限界について認めるべきではないか。とくに従来の受動的な援助姿勢に加え地域社会へ出てゆく新しい形の援助姿勢を推奨する手前、その必然性は高まる。個人的には、地域介入の目線を持たない対人援助の専門家としてだけ訓練を受けてきた者を地域に送り出すのは忍びない。むしろ他業種との連携を啓発すべきだと考える。

マイノリティクライアントが白人化を望むのは当人の利益とはならず、マイノリティとしての独自のアイデンティティ形成を手助けするべきであるという著者たちの主張に、コミュニケーションを研究する者としては共感するのだが、教育学を研究する者としては賛成してよいものだろうか判断に窮する。彼（彼女）らは、金銭的な制約や、白人至上主義から脱し切れていないカウンセラーとの遭遇から、面談を途中終了する率が高い。そのいつ脱落するとも分からない相手に、取得できる望みが薄いものために努力を求めるのは崇高で「教育的」ではあるが、「援助らしさ」はないように思える。さらに専門家がクライアントの利益とみなしたこととクライアントの要求は必ずしも一致し

ないという問題もある。それはクライアントの要求が軽んじられ、専門家が独善的に判断した目標を迫る事態を招かないのだろうか。「このセッションは、遠い未来のあなた自身のために行っている。明日直面する苦しみには焦点を当てていない。」と言うことは道義的に許される「援助」の形なのだろうか。このような懸念から、カウンセリングとはどのような活動を指すのかという具体的な指針について、もう少し丁寧に掘り下げてほしかったと考える。

Cultural competence という概念はまだまだ共通見解が示されているとはいえ、教材としてまとめるには困難が伴うだろう。それを踏まえると、本稿の指摘はやや厳しすぎる点もある。そしてそれらの指摘をしてもなお、CCDが影響力の強い書であることに異論はない。CCDは出されるたびに大きな反響が指導者から寄せられてきた。そしてその声は次の改訂で検討されている。いわば製作者と使用者の間に理想的な循環がある。アメリカ心理学界で著名な著者たちが、驕ることなく批判を真摯に受け止め、より指導者が使いやすかつ学習者に意味ある学びの体験を提供するため絶え間ない努力をするその姿勢に敬服する。

注釈

*CCDの cultural competence の概念が公衆衛生・保健領域一般とはやや異なる点があることを記しておく。医療供給者と要援助者の文化的背景が異なる時、供給者は要援助者が重大であると認識している問題に取り組まねばならず、そのために彼（彼女）らの健康に関わる価値観や習慣、コミュニケーションパターンなどを理解したうえで支援計画を立案する能力が必要となり¹、Cultural competence とはそのための態度、知識、行動、そしてそれを可能とする組織のことである¹⁻²。実際の活動は、言語的配慮や医療専門用語の解説、疫学情報の提示方法を対象者の読解力にあわせる取り組み (linguistic competency/health literacy) にとどまってお² 研究も必然的にそちらへ偏っている。

参考文献

1. Centers for Disease Control and Prevention. (2008). *Promoting Cultural Sensitivity: A Practical Guide for Tuberculosis Programs That Provide Services to Hmong Persons from Laos*. Atlanta, GA: U.S. Department of Health and Human Services.
2. U.S. Department of Health and Human Services Office of Minority Health. (2013). *What is Cultural competency?* Retrieved from <http://minorityhealth.hhs.gov/>

平田亜紀（愛知淑徳大学 非常勤講師）

和田信明、中田豊一 [著] 『途上国の人々との話し方
—国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ
出版 (2010年)

本書は著者の和田・中田が国際協力における長年の現場経験を通じて生み出したメタファシリテーションという名の対話手法について、その理論から練習方法までを扱ったものである。両者は岐阜高山に拠点を置き、日本と海外（インドやネパール）で地域づくり・人づくりに取り組む国際協力 NGO「ソムニード」の代表である。和田が現場で活動する中で身につけていった現地住民との対話術に、同じく開発の現場で活躍していた中田が注目し、この技術をメタファシリテーションとして理論化することで、伝達可能な「手法」に変えた。国際協力活動に関わっている人や対人援助に携わっている人、そうした分野に関心を持つ若者が読者として想定されているが、コミュニケーション学に関心がある者にも示唆を与えてくれる書である。

本書の主題のメタファシリテーションとは、考えを尋ねるための質問と事実を尋ねるための質問（事実質問）を明確に区別し、事実質問によって簡単な事実を積み重ねながら、「現実」を浮かび上がらせる手法である。本書によると、すべての質問は以下3つのタイプに分類される。

1. 感覚、感情（好み）

例：「朝ご飯は何が好きですか」

2. 考え、意見（思い込み）

例：「朝ご飯はいつも何を食べますか」

3. 事実

例：「朝ご飯は今日は何を食べましたか」

開発援助の現場で援助関係者が現地の人に話を聞くときには、「問題は何ですか。」「なぜそのような問題が起こっているのですか。」など2のタイプの質問をしがちである。しかし、援助者と被援助者のように、「聞く側と答える側に、上下関係や利害関係が存在する場合、下に位置する者は、どうしても相手におもねったり、気を使ったりして、相手から見えるであろうものを答えてしまう傾向がとても強い。言い換えれば、相手が期待しているのではないかと思うことを、自分の答えにしてしまう」（p.37）。そこで「なぜですか？」「～はどうですか？」といった考えを聞く質問を避け、「いつ」「どこ」「何」「誰」といった単純な疑問詞を使った質問や「～したことがありますか？」「～を知っていますか？」など何かの有無や存在を尋ねる質問を重ねることで、「現実」を浮かび上がらせ、「気づき」を促していく。つまり、和田・中田は援助の現場における対話の政治性に目を向け、弱い立場の人々の「現実」をすくい上げる手法として、タイプ3の事実質問をベースにしたメタファシリテーションを開発したのである。

本書で使われている「現実」は、実体そのものではない。そもそも言語化という作業は、必然的に実体との間にズレを生じさせるためである。また、何を質問するかで浮かび上がってくる事実は異なるため、事実質問といえども聞き手の意図は反映される。そこで浮かび上がる「現実」とは選択的なものである。したがって、事実質問によって浮かび上がってくるのは、聞き手に合わせようとすることによって生じるズレを極

力排除した聞き手の「考え」であり、そこに住む人びとの知識や経験を言語化したものである。

ただし、本書で述べられている「現実」と実体にズレがあるからといって、メタファシリテーションの重要性が損なわれはしない。メタファシリテーションとはあくまでも「気づき」を促すことが目的であり、「気づき」によって、住民が主体となってプロジェクトを行い、その後、自立して暮らしていけるようになることが最終的な目標だからである。

事実質問を行うためには、「自己観察」が不可欠である。中田の言葉を借りれば、「自分の内から湧いてくる質問の性格を見分けながら、自分の考えによる観念的な質問は事実質問に置き換えて質問を組み立てていかなければならない。この作業は、自分の質問を外から観察しているもう一人の自分を立てることなしには絶対にできない」（p.115）。メタファシリテーションの「メタ」はこの手法を「自分を外から観る」目を養う訓練方法と捉えていることから来ているのである。事実質問を組み立てる中で、自分と相手の立場を入れ替えて、その状況を分析する努力を繰り返すことにより、人間の心理と行動についての洞察力が高まってくるという。事実質問はまた、「錯綜した現代社会と人間のあり方を、シンプルかつ力強く捉えることを可能にした」と中田は述べている（p.124）。自分がかつての知識や知見を白紙に戻し、「自己観察」を試みながら、具体的な時と場を伴った知を再構築していく作業の積み重ねは、開発や貧困をどう見るかという新たな視点を著者にもたらした。

開発教育の分野で著名な田中治彦は、本書を参加型開発の第一人者として知られる「ロバート・チェンバースの『参加型開発と国際協力 変わるのはわたしたち』（2000）に匹敵する本であり、この本が英訳されれば、世界の参加型開発を一步進めることになる」と絶賛している。さらに評者は、コミュニケーション学の立場から、事実質問はより開かれた、そしてよりヒューマニスティックな対話の可能性を提示しているのではないかと考える。G・C・スピヴァクは『サバルタンは語るることができるのか』（1998）の中で、他者を代弁することの暴力、さらに知識人が従属的立場にあるサバルタンの声を聞こうとするときに生じる暴力について述べている。政治的、経済的利害関係に巻き込まれているため、声を聞こうにも、知識人の知と権力がサバルタンに暴力的に働きかけてしまうというのである。

サバルタンに語りかけるすべを模索する中で、「学び知ったことを忘れ去る」べきであるとスピヴァクは言う（p.74）。「学び知ったことを忘れ去る」とは、自らの知識が人の歴史や先入観、学習を通して獲得されたものであることを批判的に分析することであると解釈されている。そして、知識を白紙に戻すことは、他者（サバルタン）について懸命に勉強し、そして他者が答えを返すことができるような形で語りかける試みでもあるという。和田・中田の事実質問は、まさに自らの知識を批判的に分析して、一旦白紙に戻し、相手が答えることができる形で語りかける具体的な手法であるといえよう。

久保田 絢（愛知淑徳大学 教員）

マルティン・ブーバー[著]『我と汝』(野口啓祐[訳])
創文社(1958年)
(田口義弘[訳])みすず書房(1967年)
(植田重雄[訳])岩波書店(1979年)
[Martin Buber (1923) ICH UND DU Insel-Verlag
Leipzig]

二十世紀の偉大な宗教哲学者の一人として名を馳せる、マルティン・ブーバーの代表作がこの『我と汝』である。本書は三章で構成されている小冊子であるが、ブーバーが若い頃から心に留めていたものを六年という時間をかけてまとめている。彼は本書を通して、時に「ブーバー哲学」と呼ばれる基盤を表明し、数多の学問分野に影響を及ぼしたのである。

まず第一章でブーバーは、人間の持つ二重の態度から、彼らの世界もまた二重性があることを指摘した。その二重性はそれぞれ、〈われ—なんじ〉と〈われ—それ〉という根源語で表されており、〈なんじ〉と〈それ〉、そしてそれらを語る時に初めて存在できる〈われ〉について、詳細な説明がなされている。〈われ—なんじ〉はいかなる思惑も間接性も一切排除された、一対一の直接的な関係の世界であり、境のないすべてを内包する〈なんじ〉に自分は選ばれ、そして選ぶという相互的な形でもってその中に入っていく。この関係は自然や芸術作品、言語を持たない原始人の生活や赤子の行動の例を通して記述されている。これと対照的に、〈われ—それ〉が成り立つ世界には空間と時間が現れ、現存する〈なんじ〉と関係していた現在を、過去のものとする行為が存在する。別物と区別できるものが隣に並ぶ中に、それらを自己中心的に利用し当てはめ、〈なんじ〉から遠ざかる経験の対象として整列化するのである。世界ではすべてのものにある〈なんじ〉が〈それ〉になることは避けられず、しばしば両者同士変わったり変わらなかつたりする。この複雑にもつれた渦の中で、人間は日々を生きている。

第二章では、今いる世界に〈それ〉の割合が益々増していることを危惧し、再び〈なんじ〉を呼びかけ触れあう能力の必要性を説いている。人間の社会生活にある〈われ—それ〉だが、集団組織によって〈それ〉が分離し、〈なんじ〉さながらの現存性を有している場面が多くなっている。近代の国家と経済を最たる例として、〈われ〉は知らず〈それ〉に吞まれ発現した個我に支配されつつあり、その閉じられた世界から自由に解放されるためには、そうできるだけ力強い〈われ—なんじ〉関係が結べる〈われ〉、人格性を積極的に呼び求めなければならない。人格を持つ者の例として本書はソクラテス、ゲーテ、そしてイエスを挙げている一方で、個我的でしかなかったナポレオンについても言及している。

第三章で話は、〈なんじ〉の延長線上に存在する狭間、神と呼ばれることの多い、決して〈それ〉に変わることはない永遠の〈なんじ〉へと広がる。人々が語りかけているのは最終的に永遠の〈なんじ〉であり、その関係は

決して傾いたものではなく、両者双方を感じる合一した形体になる。しかしそうであっても、神さえも〈それ〉に変容させてしまい、宗教的な二律背反性も解消できないのが人間の本質である。人間同士が人間にとって最も顕著な関係領域であるため、その構築には言葉が使われるが、言葉が置かれている状態は現在の〈われ〉の状態をも反映する。ここで再び〈われ—なんじ〉への希求がなされ、安逸した場所から孤独な道へと勇敢に踏み出さなければならないのである。

本書の日本語訳は、1958年野口啓祐による『孤独と愛』と題したものがはじめて、これは同時に日本国で初めて紹介されたブーバーの思想でもあったが、この訳書の出版一年前に、ブーバー自身による「あとがき」が追加されている。本書自体の執筆から四十年余りを経て書かれているため、その期間に受け取った多くの問いに対する、最大公約数的な応答の形になっている。

この「あとがき」は野口訳には掲載がなく、後に出版された植田重雄訳(1979年)や田口義弘訳(1967年)で読むことができる。訳註と解説はどの訳にも付随しているが、ブーバーの分野に精通した植田訳や田口訳がやや詳細に書かれている。前者は文庫版収録のため広い読者層を見越してか、ブーバー自身の背景にあるユダヤ思想やヨーロッパ文化の解説がある。対して、田口訳の解説はブーバー著作集内の収録のためか、よりドイツ文学的・専門的な視点のものになっている。

哲学も宗教学も専門外な筆者による本評が、どうしても思想の表面を撫でるか撫でないか程度のものにしかならないことをここで前置しておく。しかし、コミュニケーション学入門書の中には現象学的伝統の紹介にブーバーが載っているものがあり、出版後九十年を過ぎても尚、色褪せず現代に当てはまる説得性のある内容が書かれている点で、本書がコミュニケーション研究において重要な古典であることを示している。

本文における関係構造は比較的単純に見える二元性で表され、例え話もまた特別なものはないはずだが、〈われ〉、〈なんじ〉、〈それ〉のように解説の伴う一般用語が多く、読み易さを半減させていることが翻訳文越しでも伝わってくる。野口訳のあとがきでも、原文は神秘的で宗教詩めいているが難解で、翻訳には困難を極めたという。ブーバーを取り巻く膨大な背景知識のみならず、著作自体を読む時の文化差もまた、彼の思想理解を一筋縄では行けなくさせているであろう。例えば、本書の原題名である Ich und Du の Du は、親しい人々の間で交わされる親称であるが、日本語訳や英語訳では荘厳で形式的な印象の強い「汝」や「Thou」と訳されている。この時点で、本書の内容に対する印象が読む言語によって異なることで、いわゆる誤読の可能性が生じてきてしまう。とはいえ本書全体を通じて、特に三章で随所繰り返すように出てきている、ブーバーの情熱的な主張は総じて一貫している。

彼が提起し訴えた問題と危機意識は、本書の出版当時よりも今現在の方がより実感できるように思われる。身の回りは人間以上に機械が囲んでおり、いつのまにか人々も、文字通りでも比喩の意味でも、機械を使うようにして他の人達と接していることが多いようにも感じられる。これはブーバーの表す、自身の経験のため利用対象のものとしてなされる人間同志の交流は、真正の人間関係ではないことに大いに賛同できるものである。しかし、〈それ〉も人間がより良く生きるには必需のものであることも確かであり、現代人たちがいかにして〈われ—なんじ〉と織り交ぜていくのかは、これからも続く長い課題となる。ブーバーの主張を、合理性に欠ける究極の理想論だと一蹴する者もいるだろう。しかし、では一体どのようなやり方で、自分と自分でない人々と交流し暮らしていくのかと、少なくとも真摯に向き合い導き出したひとつの答えが、本書ではないだろうか。それは、ユダヤ人入植者とアラブ人のいるパレスチナを分断のないようにと相互理解に努め、青年教育という形で実践した後年のブーバーの行動が、如実に物語っている。

(近藤恵梨奈 愛知淑徳大学大学院 グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科 博士課程前期 2011年度修了生)

ましこ ひでのり[著]『幻想としての人種/民族/国民—「日本人という自画像」の知的水脈』 三元社 (2008年)

本書は、これまでのましこ氏の著書と同様に、言語社会学的視点を決して忘れることなく、変化しつつある知識の源泉としての「ことば」に対する関心を引き続き持っているのだが、異なるフォーカスも持っている。それは、Wikipediaというウェブ上でユーザーが編集を加えることによって可能になっている百科辞典の性質や使用形態への分析・批評・介入である。この辞典への評価として、一般的に定着しているのは、以下のものである。

- ① 参加型であるために、一部の学識者の声だけを反映したのではなく、多くの人々の紡ぐ知識が反映されることを可能にした。
- ② そもそも知識とは、人々によって媒介され共有可能となるために、この辞典は、本当に身近で素肌感覚レベルの知識を掲載していることになる。
- ③ 修正がいつでも可能であるということ。知識には普遍的なものは存在しないことを証明するかのごとくである（日本語版における修正は限定されているが）。

「国語」なるものを、歴史的に相対化しようと試みた田中克彦の書『ことばと国家』の仕事や、さらに発展させてきたましこ氏は、今度はこの辞典に着目することで、知識の形成過程で生まれる問題点と可能性をみせようとしているのである。

本書は、大学生向けに語っているところが大きなポイントである。昨今の大学における、所謂「レポート」は、授業に出席していたことや当該授業で勉強したことのアリバイを、担当教員に向かって証明しなくてはならないものである。一昔前のまじめな学生であれば、担当教員の授業に足しげく通い、せせせとノートを取り、もしかしたら担当教員の執筆論文まで読破してくる。しかし、そんな学生は現在においてはほぼ絶滅危惧種となった。最近では、タブレット持参で授業に参加する学生も少数派ではなくなり、講義中に教員が言及した内容もその場でチェックされる。知識のあり方が「民主化」されてきた、とも言えるだろう。それに伴い、ノートをとる学生もめっきり減り、課題図書を読む学生もほとんどいなくなった。ウェブ上にいろいろな情報がアップロードされているからである。丁寧に書かれた学術書は、「役に立たない」高価なものとして受け止められ、その一方で、Wikipediaが廉価な知識の供給源となった。今や、大学生にとっては、この辞典は必読アイテムなのだ。いや、「読む」という行為さえ不要になりつつある。語句の検索と、カット＆ペーストで、ミニマムな編集作業さえすれば、「レポート」らしきものは完成する。知識は「読み書き」

によって成り立つのではなく、タブレット上での人差し指による「触れる」作業によって生まれるようになった。このように知識に触れる大学生向けに、本書は書かれている。いや、大学生だけではなく、すでに小学生も同じように知識に「触れる」ようになっているし、大人も同様なのかもしれない。

本書における、Wikipediaからの引用は少々度を超しているように見えることがある。とにかく長い（そのまま引用、ということで、まるで大学生のカット&ペーストのようだ）。読者は、その長い引用を読んだあとで、それに対するましこ氏の論駁も読むことになる。彼も記しているように、その行為は忍耐と知性を要求するものであり、「読む」行為に慣れていない読者たちにはアクセスできないような知識である可能性も高い（本書を難しいと認識する読者は間違いなく「読む」行為に慣れていない）。これは、逆説的であると同時に、リアリティでもある。Wikipediaに掲載されている知識を参照する人々が知識の成立過程に関わっている、という理由において、本書は、過剰なまでにWikipediaを参照する。

タブレットに掲載される知識とは、冒頭に記されたように革新的だ。何年も編集や修正をしない百科事典に比べ良心的とも言えるし、人々の素肌感覚的知識が詰まっていることもある。まことに忘備録的に「役に立つ」のだ。その一方で、「役に立つ」道具を使いこなすためには、それなりの知力と労力が必要であることも忘れてはならない。

第一に、不特定多数の人間が編集作業に関わるために、誰のどのような視点が反映されているのかつかみにくいのが、この辞典の特徴でもある。多くの人間が編集作業に参加できるのは良い点なのだが、一人の人間による文章でないため、また複数の人間が合意事項も取り付けることもなく書くために、首尾一貫したものになりにくい。しかも、通常「常識」のレベルでとらえられていることに関しては、多くの場合、その常識に基づいて記述が行われるために、その焼き直しが行われるか、それだけでなく不特定多数の編集を経ているために、編集の過程で齟齬が生じることが多い。第二に、多くの人々が「常識」に基づき編集作業をするために、常識そのものが「手つかずのまま」、つまり無作為にそこに記載されることにもなる。

本書は、その「手つかずのまま」の「常識」が掲載され、カット&ペーストされる知識の生成過程を読者にみせ、それに対して修正を加えようとする意欲作である。常識としての「手つかずのもの」には、民族、国家、人種に関する知識が多いため、ましこ氏はこのような仕掛けを本書に施したのだ。

常識とは無作為なものである。当然のように振る舞うために、誰もそこに責任を持たない代物である。常識を生み出す責任とは、個人に帰されるようなものではなく、「コレクティブな個人」に帰属されるような

ものである。近代国民国家は、「コレクティブな個人」を生み出した。その意味で、「日本人」である読者は、自分自身を「個人」として信じて疑わないし、この無作為な常識に共犯的である。そして、Wikipediaは、この意識を反映し、その過程でこれを再び生み出している。

一方、ましこ氏はWikipediaを否定していない。その使い方を解説しているのである。編集作業によって成り立っている辞典は、その編集作業の過程を吟味した上で、誰がどの視点でその記述をしているのかを加味・精査しなくてはならない。この作業を経て、知識は、はじめて使用可能なものとなる。つまり、Wikipedia使用には責任が伴うのだ。その作業を経ないWikipediaからの引用は、常識に無作為に加担した知識でしかない。そして、その著者は常識の再生産に共犯者であり、結果的に相当政治的な声明を「レポート」を書くたびに発しているともいえる。

それなら、ましこ氏は、Wikipedia上で反論したり、編集作業に参加すればいいではないか、とネットユーザーは言うだろう。それは果たして可能なことなのだろうか。無作為の常識を不特定多数の人間が集団で書き込みをしてくる中で、いったいどのような反論が可能になるというのだろうか。民族、国家、人種という概念に対して、「常識」的意見しか持たない者は、そもそもWikipediaを、民主的知識の生まれる場としては信頼を寄せている。一方で、常識の無作為性が横行する社会で逆風を感じている人間は、さらなる逆風が吹き荒れる（かもしれない）Wikipediaに参加することはない、いや、できないのだ。Wikipediaは、人々に開かれているようなフリをしながら、一部の人々の参加を難しくしているのではないだろうか。この意味で、この辞典は、公共性を著しく欠いている可能性がある。

本書は、知識にタブレットを通して「触れる」だけのユーザーに向かって、そこでの知識生成の在り方に関して意味申し立てを行い、これに対してしっかりと介入することができる「読者」を生み出そうとしている。私は、本書が人々に読まれる時には、この契機を期待したいし、その中で、公共概念の転換も図ることができるのかもしれない、と信じている。

（藤巻光浩 静岡県立大学教員）

リュス・イリガライ[著]『ひとつではない女の性』
(棚沢直子、小野ゆり子、中嶋公子[訳]) 勁草書房
(1987年) [Luce Irigaray(1977)CE SEXE QUI N' EN
EST PAS UN]

あとがきで、訳者の一人である棚沢はイリガライを「ボーヴォワール以後のフランスに出現した、…現代思想におけるピカイチの《女性思想》家である(296.)」と賛辞を贈っている。イリガライはフロイト、ラカンをはじめとする西欧的精神分析理論に異議を唱えた人だ。しかし、一方で棚沢は、本書の訳出にあたって「読者の方々に訳者たちの非力を詫びたい。すみません。努力しましたが、これ以上よい日本語にはなりませんでした(301.)」とまで述べている。それほどイリガライの思想は難解だということだ。本書は、日本の読者に何を呈示してくれるのだろうか。

イリガライは、フロイトやラカンを始めとする西欧的精神分析理論に学び、その上でフロイト批判、ラカン批判を繰り広げた女性である。その功績は、女性を男性主体構築のための「鏡」と規定し続ける西欧哲学、精神分析理論の言説を批判対象としたことにある。

精神分析理論における「主体」構築のモデルは、女性が「母」=鏡となって男性主体構築に寄与するというものである。ここにおいて女は男性主体の構築に貢献はするが、自身は鏡に映ることで主体化されるということがない。また、ここにおいて女性は鏡である「母」ではないのであれば、「(男性)主体」となることもないのだから、何でも存在となってしまう。このような前提を精神分析や西欧哲学はなぜ自明のものとしているのか、フロイトやラカンはこの支配的な言説の外に出ようとせず、常にこの言説に立ち戻り、男性中心の象徴界を維持しようと試みるのか。それは要するに、男性による言説の支配をやめたくはないのだと喝破している。

イリガライが本書で問題にしているのは、言説が誰によって「所有」されているのか、という点である。本書のタイトル「ひとつではない女の性」が示しているのは、女性の「性」は、あくまで「主体」である「男性」という「性」の裏返しとしてのみ考えられてきたということである。クリトリスを「小さな男性器」と捉えたり、「膣」を男性器を挿入する場所と捉えるなど、「女性」の「性」を男性器を基本に捉えてきたのはまさにこのことを示している。さらに、重要なのは、そのような言説は誰か、つまり「男性」の所有物であり、所持者の経済的合理性に寄与するようになっているということである。「男性」の補完物として「女性」を位置づける精神分析理論において、「女」という「性」は「男」という一つの完結した「性」を機能させるものでしかない。その「物語」は「男性」の私有財産空間を維持し、機能させるようになっている。したがって女の性を「男の性の補完物」や「欠如」

として位置づけることは男性の所有財産空間にとどまることを意味する。フロイトをはじめとする精神分析家の理論を批判し、女性器は男性器を受け入れるための「膣」だけでも、小さな男性器としての「クリトリス」だけでもないとして、「(陰)唇」に女性のセクシュアリティの基礎を置いているのは非常に興味深い。

またイリガライの試みが刺激的に感じるのは、「母」でもなく、「男性の裏側としての女」でもない、誰の所有物でもない「女」同士の出会いや連帯の可能性を示唆している点である。「女性」は経済的、社会的、文化的な交換機能において、交換の対象=商品であり、この取引に自ら参入したり、秩序や体制に言葉を上げることができない。「女性は《商品》として交換に組み込まれていながら、交換法則に対しては外在的立場にいる(104.)」。そんな「商品」としての女性が、男性によって規定された秩序の中で自らの経済的不合理を「搾取」として規定し、その改善を要求することができるのか。男性によって規定された秩序の中で女性の「政治」は可能かと問い、男性主体の象徴秩序の中で女性が自らの要求をしたり、政治をおこなうことの可能性について示している。ここでイリガライが主張するのは、権力関係の転覆ではない。女性運動は権力掌握の逆転を企図するものであるなら、男根支配秩序に再従属してしまうと指摘する。

また、象徴的秩序との関係において、女性の要求や政治が困難なものであることを、「快樂」や「肉体」に焦点をあてて述べている。精神分析において「快樂」とは自己のものではなく、あくまで象徴界の審級に耐えたもの、大他者の快樂である。この基盤に基づけば、女は、男性主体の象徴界における快樂しか味わうことができないので、自らの「ほんとう」の快樂を持たないことになる。女は自らの快樂についてさえ何も知らないのである。また、ここで「肉体」とは能記(シニフィアン)によって印しづけられ、男性の幻想の支え台となり、主体化を助けるものである。

いかに精神分析や西欧哲学が男性主体の構築を中心に展開されてきたか、それがいかに問題含みであるかをイリガライは述べるのだが、面白いのは女性の抵抗の方法として「流体」や「現実界」の可能性について着目している点とである。「現実界」は、適切な象徴化に還元しきれない、内部摩擦、圧力、運動など、特有の力学である。この「物理的現実」は、象徴秩序にもとづく数量化に還元しきることができず、そのときの状況に応じて変化し、その度合いも異なる偶然的なものである。このような、揺れや動き、流体がいかに象徴界と関係しているか、その力について述べていることは、男性主体の象徴秩序を、女性が女性という立場の中から政治を行う方法を示すものであり、大変興味深いものである。

高橋芽惟(アジア女性資料センター職員)

Griffin, E. (2006). *A First Look at Communication Theory*. (6 edition). New York: McGraw-Hill Companies.

コミュニケーション学の授業においてどのような教科書を選択するか、という判断は難しい。その授業が特定の分野におけるコミュニケーション学（異文化コミュニケーション等）ではなく、コミュニケーション学の概論的な内容を教えることが狙いの際には尚更そうである。コミュニケーション学やコミュニケーション論と銘打たれた本は数多く存在するが、そのほとんどが著者のバックグラウンドが色濃く反映されたものや、ある特定の分野に偏ったものである。しかし、教員が自分が学んだ事のない分野のコミュニケーション学を、ある程度の深さまで教える事が非常に困難であるのも確かだ。ここでは、Em Griffin 著、“A first look at communication theory” という本が如何に上記のような問題の解決策となるかを、本の内容を紹介しながら検討していきたい。

まず本書の構成であるが、最初に『理論とは何か』という問について論じている。その後、コミュニケーション学の学際性から派生し、Objective Approach と Interpretive Approach について比較・検討されている。即ち、Qualitative、Quantitative、Rhetoric 等の手法や立場の違いについて言及することを避ける事無く記述しているところが本書の特色である。その後、32の理論についての解説が豊富な具体例と共に、しかし簡潔に展開される。最後に、その紹介された理論をマッピングし統合しようとする試みが提示されている。

この本をコミュニケーション学の授業に採用すべき根拠の一つ目が、本書の序論の部分で論じられる『理論とは何か』という考察である。理論が何か、という議論は意外にもあまり授業で深く扱われる事はない。本書の序論では、ある女性が次の日の自分の結婚式の会場を屋内にするか屋外にするかの判断をするために、どのように次の日の天気を予想するか、という意外な例が描写される。彼女は天気予報を見たり、自分の知っている天気の推移の知識を利用し、その判断を下すのだが、この例を読む事で実は私たちが日常的に理論（そのような呼び方ではないにしても）を活用している事に気づかされる。つまり、天気を予想する際にも、そこには様々な理論的根拠が使われていて、それを活用する事で私たちの生活はより便利になっている、ということが論じられている。それでは天気の推移を予想するように、人間関係のプロセスを説明するためにも理論が活用できるのではないだろうか、という問いかけが述べられる。つまり、一見『理論』という『学者が使っている私たちには関係のないもの』を『私たちの生活をより良くするもの』として紹介する事で、学習者の内的な動機を促している。

根拠の二つ目が、本書の取り扱う理論の幅の広さである。32もの理論が Interpersonal Communication、Group and Public Communication、Mass Communication、Cultural Context という四つの大きな枠組みの中で展開されている。全ての理論をここで紹介する事はできないが、Expectancy Violation Theory、Relational Dialectics、The Rhetoric of Aristotle、Narrative Paradigm、Agenda-Setting Theory と一部取り上げただけでもその内容が多岐に渡っている事が分かる。特に学習者にコミュニケーション学のバックグラウンドが無い場合には、教える理論や分野に偏りを持たせず、様々な理論や分野に触れさせる事で、その学習者にあったアプローチを検討させる事が必要であろう。

三つ目は、具体例等を使った分かりやすい理論の説明である。本書の中では度々『理論は役に立つものである』という主張を垣間みる事ができ、ほぼ全ての章で面白く分かりやすい例を取り上げ、その理論がどのように生活の中で活用できるかが述べてられている。例えば、Relational Dialectics (160頁以降)を説明している章で“Children of a Lesser God”という映画の中の男女二人の恋愛が例として取り上げられている。ある女性が男性とダンスをする時に、男性に強く惹かれている様子が映画では映し出される (connectedness)。しかしその一方で、その女性は傷付けられるのを恐れて、男性に踏み込まれたい自分だけの領域を作ることも映画では描かれる (separateness)。大学の授業の中で学生に理論を説明する際に、この本の中の例を取り上げ、Dialectics であれば実際にその映画を見せることで、学習者を飽きさせる事無く、分かりやすく Dialectics の中の理論的構造を教える事が出来るであろう。

そのような理論が論じられる各章の最後に展開される『理論への批判的視点』『理論をより深く理解するために投げかけられる質問』『理論をより深く学ぶための書籍紹介』を四つ目の本書を勧める理由として紹介したい。本書では説明される全ての理論に対して、著者は批判的な視点を提示する。例えば、天気予報だけを頼りにしても未来の天候を予想するには不十分なのと同じように、どの理論にもその理論では説明できない事象や理論の主張が内包する矛盾がある。例えば Uncertainty Reduction Theory (130頁以降)には“相手の情報が少ないほど、その相手のことを知ろうとしてコミュニケーションが活発になる”という原則があるが、この章の138頁ではこの原則に対して疑問を投げかけている。相手に対する情報が少ないから相手の事を知ろうとするのではなく、相手に興味があるから相手の事を知ろうとするのではないだろうか、という疑問を、その疑問と関連する先行研究と共に検討している。このような批判的な視点は特に大学生である学習者には必要であると考えられ、理論に対して疑

問を投げかける事でその理論の短所を知り、ひいてはその他の理論がその短所をどのように補い得るのか、という議論に発展させる事が出来る。この事と関連して本書では各理論をより深く理解するための質問が紹介されている。この質問を授業の中で議論させることにより、学習者同士の学びに広がりを持たせる事も可能である。そのように理論への理解を深めた後、その理論をより一層学びたい学習者には各章の最後に記載してある、理論が紹介されている原著や理論を利用した研究論文を参照するよう促す事が出来る仕組みになっている。

最後に、本書に付属されている CD-ROM に関連して一つエピソードを紹介したい。私はこの本を日本の大学に大学生として所属している時に購入し、コミュニケーション学を勉強していた。コミュニケーション学を大学で専攻していなかった自分には本書の具体例や専門用語だけではない説明が非常に有り難かった記憶がある。特に私の興味を引いたのが付属の CD-ROM であった。そこには理論を実際に作った研究者を Em Griffin がインタビューしている映像が収められている。理論を構築した研究者の実際の説明が聞けるのはもちろん有り難かったが、それよりも本や論文では感じる事のできない海外のアカデミックな雰囲気を味わえる事が非常に刺激的であった。コミュニケーション学に関してほとんど無知であった自分は海外でコミュニケーション学を学ぶことを希望し、気づいたらコミュニケーション学の博士号をアメリカで取得していた。海外の大学や学会でこの CD-ROM に登場していた研究者に会う事ができた際には、非常に感動した事を覚えている。

本書が、紹介した理論をあえて批判的に論じるように、この本の長所ばかりを強調せずに、あえて日本の大学で本書を使用する事に対する懸念を検討してみると、この本は英語圏、特にアメリカの学習者に対して書かれたものであり、日本独自に発展したコミュニケーションの理論や発想は本書では学ぶ事ができない。私がそうであったように、コミュニケーション学に対する盲目的な海外志向につながる可能性も否定できない。しかし、日本のコミュニケーション学の書籍と本書を併用することで、バランスよく学習を促す事ができれば、コミュニケーション学に興味のある学習者に刺激的な学びを提供する事ができるであろう。そしてその刺激こそが未来のコミュニケーション研究者を育成する起爆剤になると考えられる。

※この書評で紹介したものは 6 edition であり、購入する際は内容が刷新された 2011 年発行の 8 edition が勧められる (8 edition が以前の edition をどのようにアップデートしたものであるかを筆者のウェブサイトで見ることが出来る (http://www.afirstlook.com/changes_in_the_8th_edition))。

今井 達也 (南山大学教員)

Richard Schechner “Invasions Friendly and Unfriendly: The Dramaturgy of Direct Theater” (In *Critical Theory and Performance*. Ed. Janelle G. Reinelt and Joseph R. Roach. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1992. 88-106.)

1992 年に現ニューヨーク大学 Tisch School of the Arts の教授である Richard Schechner によって執筆された本著は、パフォーマンス学においてはもはや古典となりつつある。「権力」(authority)と「大衆」(people)との間での、公的な場における社会的運動を通じた関連性への問い、及び運動における「公式」(official)と「非公式」(unofficial)との差異、あるいは近代的な「カーニバル」(carnival)や「祭り」(festival)が持つパフォーマンス的意味に関しての問いかけから始まる本著が、社会運動に対する学術的な眼差しを与えながら、その後のコミュニケーション学におけるパフォーマンス理論構築、及び同学術領域における実践的考察の余地を構築するための基盤となり多大な貢献を果たした事は、もはやあえて述べる必要はないだろう。そして、本著の果たす価値は、21 世紀以降も理論として陳腐化されるどころか、相次ぐ社会的運動、とりわけ昨今のオンラインコミュニティによる「市民」運動の傾向が加速化する中で、より再評価されるべきものとなっている。

本論の中で、Schechner は上記に述べた本著冒頭の問いかけに対し、6 つの事例(中国・天安門広場、米国・ベトナム反戦運動、東西ドイツ・ベルリンの壁崩壊、インド・ラームナガルの宗教劇、米国・マルディグラ/ズル、米国・Daytona Beach Spring Break Weekend)を挙げ、これらをパフォーマンス論的観点から考察していく。

unofficial な運動としては、天安門広場・ベトナム反戦運動・ベルリンの壁崩壊におけるカーニバル的な楽しみ・共同意識・アイロニーといった要素によって公的な政府権力を脅かす劇的パフォーマンスの意味を、弁証法的な「儀式」(ritual)と社会運動としての公的な「劇場」における交差の中に示した。これらの活動は、時に official な主導者としての権力側が想定する儀式的規範を越えた予期せぬ結末を偶発的に生み出す「演劇」となり、その結果として既存の規範枠組みを再構築する可能性があるものであると Schechner は述べる。一方で Schechner は、このようなカーニバルの当事者は政治性を伴う自らの演劇によってもたらされる望ましい結論が長期的に継続するものだと考えがちであるが、それはあくまで既存の規範的枠組みに一時的に取って代わるだけの理想郷的光景であると警鐘を鳴らす: “Carnival, more than other forms of theatre, can act out a powerful critique of the status quo, but it cannot itself

replace the status quo.”¹最終的にそのカーニヴァルが演出する非日常性が終わりを迎える事で、再び大衆を日常の中へと回帰させていくのである。この意味で、Schechner はカーニヴァルが社会的規範からの根本的逸脱ではなく、あくまでその鏡像に過ぎないのであると述べる。²

一方、unofficial と対比する official な運動として、Schechner はマルディグラ/ズル、及び Daytona Beach Spring Break Weekend の「祭り」に関して言及する。非公式的な祭りが予期せぬ理論的転回の可能性を持つのに対して、公式な運動においては権力による政治的・商業的意図によって綿密に計画された側面が強く、予め設定された枠組みの中で秩序を持って行う事が期待される。Schechner によれば、近代的な「祭り」においては特にこの傾向が強く、既存の社会的規範を踏襲しながら、権力によって設定されたステージの上で展開され、予め決められた終幕を迎える事を期待された、まさに国家装置(state apparatus)としての機能を果たすものである。従って、当然 official な運動からは反社会・反規範的な要素が厳しく制御・管理されており、それはまさに運動の中の娯楽としての側面だけを抜き出し、大衆を巻き込みながら規範的イデオロギーを増幅させる事を目的としたものであると言える。

本論文の中で、Schechner は度々既存メディアと運動との関連性についても言及している。既存メディアが運動において果たす役割に関しては、劇としての運動を意図的に切り取り、それを公的な眼差しとともに喧伝するものであると批判する。とりわけパフォーマンスにおいては、商業的利益をもたらすエンターテイメントを是とする既存メディアによって焦点を当てられたものこそが「ニュース」という形で恣意的に official な「商品」として生産される事を Schechner は問題視する。それはまさに、権力側が大衆に対し傲慢にも一方的に提供する、運動から政治性が失われた単なる消費物としてのエンターテイメントであり、既存の儀式的規範の再生産装置なのである：

” It is multilayered, throwaway flow of images and words combining on-the-spot action with sophisticated editing and framing procedures to create a narrativized and ritualized product.”³

以上の Schechner の指摘は、現代の事象を考察する上でも非常に有益な示唆を与えてくれるものである。昨今における「社会運動」の例として、ここではオンラインコミュニティを中心とした、ネットの市民(=ネチズン)による運動を検証してみたい。奇しくも自ら「祭り」と称するネチズンによる運動は、その匿名下の集団的アイデンティティが演出する共同意識、共通の仮想敵を「ネットの力」で討伐する事を目的としたあたかもゲームのような楽しみ、権力側を批判する辛

辣なアイロニー、そして制御できない程の勢いに発展する「炎上」と予測のつかない帰着点という側面においては、まさに Schechner が述べる unofficial なカーニヴァルとしての様相を呈する。しかし一方で、その活動が社会的儀礼からの根本的逸脱ではなく、あくまで既存の儀礼的枠組みの中における「鏡像」として、新たな社会的規範を生産するイデオロギー装置として機能するという指摘もまた、考慮されるべきだろう。これは、国内においては「ネット右翼」と呼ばれるようなネチズンによるラディカルな排他的ナショナリズム活動、また国外においてはエジプトの民衆運動「アラブの春」で見られた民主主義への理想とその後の不安定な情勢という現実とのギャップによって示唆されるものである。そして近年においては、オンラインにおける運動は政治的・商業的意図に取り込まれながら、その非公式性を消失させるような傾向すら見られる。2012年の衆院選挙以降の選挙活動においては、保守派の政党や候補が最終日演説をネット文化と親和性の高い秋葉原で行い、多くの若い保守的な聴衆を集めながらナショナリスティックな光景を演出する事が習慣となりつつある。インターネットを活用した選挙運動が公式に解禁された後では、いかにしてネット上に存在する若い層を取り込むか、という事を目的としたオンラインコミュニティの行動傾向分析が急速に進みつつある。このように、「権力側」の意図の元で管理が進むオンラインの活動から、「市民」であるネチズンによる運動の自発性や偶発性が失われつつあり、その活動が徐々に official なものとして規範的イデオロギーの生産装置の中に取り込まれつつある。

パフォーマンス研究において、Schechner が果たした功績は非常に大きい。そしてその理論は、近代の我々が直面する多くの社会的な事象をパフォーマンス的視点から分析する際、今なお実に多くの示唆を与え続けるのである。

村井秀輔(明治大学大学院 情報コミュニケーション学 研究科 博士後期課程 所属)

1. Richard Schechner, “Invasions Friendly and Unfriendly: The Dramaturgy of Direct Theater,” in *Critical Theory and Performance*, eds. Janelle G. Reinelt and Joseph R. Roach (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1992), 103.

2. Ibid., 88.

3. Ibid., 104.

ジュディス・バトラー[著]『戦争の枠組—生はいつ嘆きうるものであるのか—』（清水晶子[訳]）筑摩書房（2012年）[Judith Butler. (2009). *Frames of war: When is life grievable?* Brooklyn, NY: Verso.]

本書を取り上げた理由は、ここ数年 M. J. サンドルの書評に取組み、取りあえずの理解を得、次はより自分の博士論文からの関心ごとである戦争や記憶の語りに近い分野での書評に取り組みたかったからである。最初はマイケル・ウォルツァーに数年かけて取組もうかと思っていたが、より最近刊行されたジュディス・バトラーの本書を取り上げることとした。

“Gender Trouble” で有名な彼女が戦争や暴力について、どのように論を展開するのかにも関心があったからである。期せずして第4章では、マイケル・ウォルツァーの唱える正しい戦争と不正な戦争の区分に対する定義に無意識に織り込まれている文化的前提への批評も含まれていた。文化や規範とからめての記述もあり、本書の書評の取組みには大きな収穫があった。

本書は、2004年から2008年にかけて発表され、改定を経た論文集である。私たちの情報の捉え方、即ち認知が、日々の生活の中で様々なコミュニケーション活動や文化の形態・規範を通じて、戦争や暴力が正当化され、それらに対して抱く感情や倫理のあり方をも統制される仕組みについてのバトラーの批評である。

「不安定性が格差を伴って割り当てられている」（12頁）ことが批評の出発点である。そしてその割り当ての不等さに対し我々の認知や感情を鈍化させるその枠組を言語化し、可視化することで、国家の暴力に抵抗するのだという。また、抵抗の基盤としてプレカリアティを位置づけることにより、アイデンティティにより分断される枠組にも横断的に協働し対処するのだという。

具体的に本書は次の5つの章で構成されている。第1章「生存可能性、被傷性、情動」では、人間の存在論について話が始まる。人は他者とつながった存在である。それゆえ社会的・政治的秩序に影響をうける「社会性のリスク」（82頁）を常に抱えている反面、他者とのつながりゆえに正義や愛を知ること出来るという。問題は、そのリスクが不平等に特定の層に配分され、何に対して怒り・悲しむのかという情動さえもが操作される社会制度であり、文化の実践であり、認知の操作なのだとしている。

第2章「拷問と写真の倫理」では、写真が果たす機能について、アブグレイブでの米国兵士による捕虜への拷問の事例について他の批評家からのコメントを基に、持論を展開している。バトラーによると、アブグレイブでの写真は単なるポルノグラフィではなく、「同性愛行為に対するイスラムのタブーと米軍内のホモフォビアが、完全な連携を取って機能しているとい

う状況かもしれない。」（117頁）と分析している。アブグレイブでは、写真がその連携を実行する役割を果たしたが、写真が軍外部へと流出し、コンテキストが変わると、写真は犯罪の証拠となり、拷問された人間の苦しみがそれを見る者の情動をゆさぶり、倫理的な問いと法的行動を引き起こす原因となったという。

第3章「性の政治、拷問、そして世俗的時間」においては、アブグレイブやグアンタナモにおける米軍兵士の拷問や強制的な性的暴行が、「文明化の主題と関係した、暴力とセクシュアリティとの結びつき」（163頁）として、性が政治的に利用されている枠組の事例として、読みなおしている。「近代」や「進歩」という概念の理解が、同性愛に対する許容度で測られ、それが子どもの養育を同性愛カップルには認めない狭い許容度にもかかわらず、特定の宗教、特にイスラム教に対し、同性愛の許容度がなく後進的であるとして、

欧米諸国が自らの「近代性」を恣意的に表現していると、宗教と世俗的な慣行を比較して分析している。

第4章「規範的な物の名における非-思考」では、主体やアイデンティティ・文化などが、本来その枠が既に存在するのではなく、権力の作用により形作される「複雑で動的な性質」（196頁）を持つという立場で論が展開されている。ただ、枠や規範性が不要だという主張ではなく、既知の枠組や文化を中立的なものとして捉えるのではなく、比較と批判を通じて権力の作用をうけ成り立つことを分析し、枠組を変化させることにより、文化の衝突という文化相対主義では解決できない問題を解きほぐす実践の試みを提案している。

第5章「非暴力の要求」においては、主体の形成と暴力・非暴力の関係について論が展開されている。人はその成り立ちから「暴力にまみれている」（206頁）ものの、そのような成り立ち方を抵抗なく受け入れるのではなく、暴力に対し異議を唱え、だからこそ葛藤が生まれ、変化する可能性を受け入れ、「生きる責任を引き受ける」（206頁）ことが重要であると展開している。

以上5つの章において、抽象度の高い提言が、具体例を用いて、複数回言い換えられたり、対比させたりしながら議論が展開されている。接続詞の使用の巧みさを見習いたい、と思わせる執筆スタイルである。本書には、様々な観点から書評が可能であろうが、紙面の関係でバトラーの批評が与える希望についてと、文化という枠組に関して書評を行う。

何かの本で政治学は、達成までに困難な道のりではあるが人々に希望を与えなければいけない学問である、と読んだことがある。戦争や暴力、拷問と非常に政治的な批評を行う本書にも、サンドルの著作と同様に、読後に希望が読み取ることができる。プレカリアティが特定の層に配分され、日々のメディアを通じた政治や文化活動により私たちの認知や感情・倫理までが操作されるという、楽しくない事項が本著の主題ではあ

るのだが、バトラーはその枠組の設定への抵抗手段も提示している。その枠組の中にある物や含まれる人と、そうでない物や人を弁証法的に比較し、状況を変え分析することにより、枠組自体の正当性が揺らぎ、はみ出すものが見えてくるという。第2章や第3章にあったように拷問の写真が、あるコンテキストではイスラム教徒に対する米軍の女性蔑視やホモフォビアを体現する差別行動の記録であったが、流出した同じ写真が、国際的に法的に倫理を問われる証拠となり、拷問や暴力を受けていた名もなきはずの被害者が、写真を見る者の感情に訴え、正しい行為としての戦争の倫理的矛盾や認知の枠組のほころびの証拠となる。枠組がアンタッチャブルな解読不能なものではなく、必ず解読のヒントが存在する、というメッセージは非常に力強い。自らが内省的になり、枠組の内と外にあるものをそれぞれ見極めようと努めることで、知ることができると。結果として目指すのは諦めや「シニシズム」ではなく、「言説の反転が生じる条件と条項」のより詳細な検討が重要であると提言されている(193-194頁)。自分も鍛錬すればなんとかなるかもと思わせる示唆が魅力的である。

また、異文化コミュニケーションの研究者として、「文化」や「文化比較」をどうとらえるべきなのかという長年折につけて考えてきた観点についても(何年か前にCAJの文化比較に関するパネルも年次大会で取上げられた記憶がある)、第4章でバトラーの持論が展開され、興味深かった。バトラーは、文化やその規範性からアイデンティティや主体などまでは、他と差別化し、「一連の予めの排除」(198頁)にもとづき領域を成立させているとしている。よって、文化を本質化し、規範を、すなわち文化的特徴を、リストアップすればするほど、含まれない要素や排除される人々が増え、時の経過や状況に応じて変動する要素を考慮に入れず、対立を解消するきっかけがますます失われると考察している。バトラーの表現を借りるのであれば、「主体はすでに存在して・・・おり、複数の主体を和解させる正しい道具を手に入れさえすれば、主体間の差異は調整されるだろうと考える枠組を自明視することを拒む」(198頁)必要があるというのだ。文化的差異を相互に理解すれば、分かり合えると考えること自体が、流動的でグローバル化の進む現実在即しておらず、むしろ枠組みをセットし、文化を比較可能な普遍的な存在であると研究を進めること自体が「移動する集団を寄せ付けないようにする一つの方法である」(178頁)とまで記述があり、手厳しい。ただ、文化の枠組自体を否定し拒むのではなく、受け入れ、そこから枠組を枠の内と外から比較し、眺めなおす作業が必要だと展開している。Martin & Nakayamaの提唱する弁証法的(dialectic)な異文化コミュニケーションのアプローチがそのままバトラーの著書で展開されているようで興味深かった。文化の特徴を記述する試

みは必要だが、その記述に持ち込まれる政治性には常に意識的であれとのバトラーの指摘は心にとめておく必要があるであろう。

福本 明子 (愛知淑徳大学教員)